

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会 [ 公開議題 ]

議事概要

日 時 令和3年6月3日(木) 9:59 ~ 10:37  
場 所 中央合同庁舎第8号館 6階623会議室  
出席者 上山議員、梶原議員(We b)、小谷議員(We b)、  
佐藤議員(We b)、篠原議員、橋本議員(We b)、藤井議員(We b)、  
梶田議員(We b)  
(事務局)  
別府内閣府審議官、赤石事務局長、柳統括官、佐藤事務局長補、  
覺道審議官、千原審議官、井上審議官、高原審議官、清浦参事官  
(科学技術振興機構)  
中村顧問(We b)

議題 STI for SDGsの動向について

議事概要

午前9時59分 開会

上山議員 それでは、おはようございます。

定刻になりましたので、只今より総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会を始めます。

議題は、STI for SDGsの動向についてです。

本日は、中村道治科学技術振興機構(JST)顧問の中村先生にオンラインで参加をさせていただいております。

それでは、早速で恐縮ですが、中村顧問、御説明の方をよろしく願いいたします。

中村顧問 ありがとうございます。皆様方、おはようございます。

科学技術振興機構、JSTの中村です。本日、このような機会を与えていただきまして誠にありがとうございます。

私は2018年から3年間、国連の技術促進メカニズムを支援する10人委員会の委員として活動してまいりました。本日はこの経験を通じて学んだこととお話しさせていただきまして、

日本のSTI for SDGsの取組の参考にさせていただければ幸いです。

次のページ、お願いします。

世界のSDGs活動において、これまで例えば児童の就学率の向上であるとか、電力へのアクセスとかモバイル通信の普及など一部進捗が認められておりますものの、このままのペースでは2030年の目標達成というのは非常に困難であるとみなされてきました。

さらに、COVID-19パンデミックは多くの犠牲者を出してきたばかりかSDGs全体としての遅れ、取り分け弱者と強者の格差が拡大しております。世界の平均気温は依然として上昇を続けており、2050年までにカーボンニュートラルを達成することを主要国が表明しましたが、多様な新技術の開発、あるいは社会実装、それにまして社会の変容が急務になっていきます。

また、先進国、開発途上国を問わずデジタル革命の期待が高まる中で、人材育成、インフラ投資、セキュリティ、ELSIなど多くの課題を抱えているところです。

地域の活性化も世界共通の課題でありまして、それぞれの強みや文化伝統に根ざした地域SDGsの加速が求められています。日本の場合は内閣府、地方創生本部とCSTIの連携強化や地方大学、高専の積極的な参加が不可欠と考えています。

各国は様々な共通の課題を抱えています。これらに対してどのように取り組むか実践的な議論が国連中心に行われてきました。

次、お願いします。

STI for SDGsについては、当初私たちは暗中模索でしたが、これまでに大きな方向性が出てきたように思います。2019年に出された国連のGlobal Sustainable Development ReportはSDGsのための四つの手段と六つのエントリーポイントを示したことで評価されております。四つの手段としてガバナンス、経済とファイナンス、個人と集団としての活動、科学技術を挙げて、これらの手段を包括的に駆使することが推奨されているところです。

また、世界、国、地域・セクターレベルでSTI for SDGsロードマップを用いてシステム的に取り組む方法論が共有されるようになり、これに準拠するグローバルパイロットプログラムが開始されました。

さらに、SDGsは科学の変革を促しております。企業活動においても環境や社会との共生が強く意識されるようになりました。今年になって米国にバイデン政権が誕生し、国際連携の下でSDGsにコミットする姿勢を示したことは大変注目されているところであります。

以下、これらの幾つかについてもう少しお話ししたいと思います。

次のスライド、お願いします。

細かな字で恐縮ですが、国連ではECOSOC、経済社会理事会がSDGs活動全体を担当しております。STI for SDGsの促進に関しては、Technology Facilitation Mechanism、TFMが設置され、その中で現在45の国連機関からなるInter-agency Task Team、IATTが中心に活動し、10人委員会はそれを支援しています。

TFMでは毎年5月にSTI Forumを開催し、STI for SDGsの経験や課題を共有してきました。TFMの活動状況は閣僚級からなるHigh Level Political Forumで毎年7月に報告され、国連総会において4年に1度開催されるSDGs Summitで議論されています。また、多様なステークホルダーがTFM活動を支える建て付けになっています。

我が国のSTI政策サークルは原子力とか宇宙とか海洋など一部を除いて伝統的に国連の動きに関心が薄かったように思います。今後、注目していく必要があります。

EUや中国は国連のこのSTI for SDGsのプラットフォームをうまく利用して自らのSTI国際戦略展開というのを拡大しているところであります。

次のスライド、お願いします。

今年のSTI Forumは5月初めにオンラインで開催されまして、STI for SDGsの加速とCOVID-19からのよりよい形での回復が議論されました。今回拡大された閣僚級セッションでは、日本から井上大臣がビデオメッセージで、第6期基本計画の中にロードマップの考えを盛り込んで、STI for SDGsに取り組むこと、国際連携を強化することを特に強調されました。

また、米国からもSDGsについても積極的な姿勢が表明されました。また、これまでのTFMの評価、あるいは先端技術の開発と応用、あるいはその他の重要課題の進捗状況についても議論がございました。

次のスライド、お願いします。

STI for SDGsロードマップというのは今回のSTI Forumでもハイライトの一つであったのではないかと思います。ロードマップの重要性は、2016年のSTI Forum以来、議論してきたところではありますが、このロードマップ作成のガイドブックを作ることになって、2020年に最終版をまとめることができました。このために日本政府が

ら世銀に資金を拠出していただきました。

また、2019年のG20大阪サミットでロードマップの基本指針を付属文書としてまとめるなど、世界のロードマップの活動をリードしてきたところです。

このSTIロードマップは単なる技術ロードマップではなく、国の開発プランとSDGsプランとSTIプランの交差点での統合プランです。具体的には国の優先事項に基づいて目的、スコープの定義をし、現状分析、ビジョン・ゴール・ターゲットの設定、様々な道筋の評価を経て具体的なロードマップを作成し、これを実行・モニター・評価を行う。それで当初予定していなかった要因や技術進展などを反映してまた次のサイクルに入るという極めて具体的な方法論です。

ここでは国レベルのロードマップマップを紹介しましたが、グローバル、地域、セクターレベルでも同様に取り組むことが可能です。また、それぞれの間の連携はSDGsにおけるガバナンスの重要なテーマであります。

次のスライド、お願いします。

ロードマップを世界に広げるために、パイロットプログラムが国連、IATFで企画され、各国に募集を掛けましたところ、20か国余りから参加の意思が表明されました。

そのうちガーナ、ケニア、エチオピア、インド、セルビア、この5か国が2019年にパイロット国に選定され、今年2月にウクライナが追加されて現在6か国になっています。

各国はSTI for SDGsの主担当機関を国内でアサインし、国連機関やパートナー国と連携して進めているところでありまして、日本はケニアとインドのパートナー国になっております。

各国はまだ多くがロードマップの策定段階ですが、ガーナとセルビアは実装段階に入っています。今後パイロットプログラムのスケールアップを図り、STI能力の開発、技術移転、仲介活動などを進める上で、一番下にありますように、STI能力の開発、あるいは技術移転、仲介活動などを進めるために、Partnership in Actionというものを展開しようではないかということになっておりまして、これはSTI Forumでも支持され、その実現に向けて国連が日本を含む主要各国と相談を現在しているところであります。

17ゴールに対して、6か国のSDGs Index、すなわち達成度を右に示しておりますが、SDGs 9、すなわち産業、技術革新、すなわちSTI能力におけるインデックスが同じ国の中でも一番低いということが歴然としておりまして、日本はこの意味で産業・技術革新、あるいはSTI能力の向上という意味で大いに貢献できると考えております。

次、お願いします。

毎年このパイロットプログラムの進捗状況をモニターしておりますが、パイロット国は飢餓であるとか、食料、教育、技術革新などの優先テーマに対してロードマップを策定し実装中です。

また、ビジョン、ゴール、ターゲットの選定において、政府のトップレベルが参画するという点で各国努力し、そのように進んでおります。

最も重要な課題は、マルチステークホルダーの能動的な参画を実現すること及び国の開発計画とS T I計画の中に、S D G sに関する取組を明確に位置付けることです。また、ロードマップを策定し実践する上で当然のことながら十分な予算がない、あるいは最新の統計データ、あるいは専門的知識が入手しづらいということが開発途上国から言われておりました、このためには国際連携が必要だと我々も考えております。

日本では、第6期基本計画及び統合イノベーション計画の中でSociety 5.0の主要課題についてのロードマップを実践し、有言実行で成果を上げるということになってはいますが、世界は日本のこの取組に非常に注目しているところです。

次、お願いします。

S D G sあるいはC O V I D - 1 9というのは、S T Iシステムのパラダイム変革を促しております。S D G sを達成するには複雑な課題に対するS T Iの有効性の向上、あるいはC O V I D - 1 9や気候変動など緊急的な課題への対応能力、予想されるリスクの排除、公正性、あるいは人類の共通財産としての成果の迅速な共有等が重要でありまして、これがS T Iシステムの変革の動機になっていると思います。

昨年、C R S P R - C a s 9でノーベル賞を受賞したジェニファー・ダウドナ氏の言うように、C O V I D - 1 9の出現で科学の急速で永続的な変化が始まっていると私も思います。

一方、研究者の自発的な発想に基づく基礎研究等の注意深いバランスが必要であることも多々指摘されてきました。国連T F Mではオープンサイエンス、オープンデータが開発途上国の能力向上の観点で議論されているところです。

次のスライドをお願いします。

科学と政治、社会のインターフェースが特にC O V I D - 1 9の中でハイライトされてきました。科学と政治の間のリニアモデルから、科学、政治、社会のエコシステムへの転換。自然科学、人文・社会科学を含む総合知の活用という観点で、新しいフェーズに入ろうとしています。

国連では経済社会局、DESAが、Policy Briefで五つの教訓をまとめて報告しておりますが、科学ベースの意思決定の能力の強化、あるいは科学への信頼性の拡大、研究協力を実践するための知識、データの共有、研究成果の世界的な共有、科学的な準備を含めた現状の緊急的な評価等を掲げているところであります。

この関連では、INGSAが非常に深く議論しているところでありまして、この9月にモントリオールで開催される次回会議で、このCOVID-19の教訓を深めて議論をするようになっていきます。これらの結果は国連のTFM活動にも生かされます。

AASのビル・コルグレザー(William Colglazier)さんが言うように、文化とか価値観とか倫理とか信頼とか歴史とか、こうしたものが意思決定に非常に重要であるというのは、今回のCOVID-19でも痛感したところでありまして、科学と政治だけでなく社会を加えたエコシステムの構築が意思決定に重要であると現在捉えられております。

次のスライド、お願いします。

米中の技術覇権争いがエスカレートしてきまして、米国バイデン政権はサプライチェーンに関する大統領令等矢継ぎ早に施策を発表し国際連携を強めている中で、中国はこれに対して色々な施策を打ってくる、こうした中でSDGsに対してどういうインパクトがあるかということとはよくよく我々は見えていく必要があると思っています。

米中がSDGsにコミットする姿勢が、カーボンニュートラルの合意形成、あるいは先端技術開発加速するという意味で非常に歓迎したいところでありますが、一方、技術摩擦であるとか、軍事技術競争、経済安全保障の侵害、各コミュニティへの規制等の問題が一層深刻化することは懸念されておりますし、また開発途上国の技術格差の拡大も非常に心配しているところであります。

地球規模の課題に関する基礎研究については、やはり規範・ルールを遵守することを前提に米中日欧の協力は必要だと思っております。

次、お願いします。

これらを踏まえまして、国際協力について少しまとめておりますが、日本はこれまで色々なことをやってきましたが、府省がそれぞれバラバラにやっていただいている、このため、日本全体の戦略はよく見えないということが海外からも指摘されております。

来年のTICAD8においては、日本、アフリカ連携の統合戦略を検討して、骨太のアクションプランを起こしていただくことをお願いしたい。これは将来のアフリカ市場、日本にとっての市場を育成するという意味で非常に重要なことと思っております。

ロードマップについては先ほど言いましたように、Partnership in Actionを日本のリーダーシップにより、是非実現させていただきたいということであります。

過去、SDGsが始まってから、今まで国際連携関係の予算が拡大したかということ、あまりそれが見えてこない。国際連携予算が従来の延長にあり、SDGsに十分に対応出来ないため、例えばSTI-ODAの拡大、SBIRの活用、企業投資を含む色々な施策が必要ではないかと思っております。

次のスライド、お願いします。

SATREPSについては御承知と思いますが、これは日本が2008年以来進めてきた世界的に有名なプロジェクトであります。SDGsの観点からは大学は研究機関、共同研究に終わらないで、研究開発、技術フィージビリティスタディ、あるいは社会実装、人材育成を含めた包括的なプログラムに拡大することが必要でありますし、企業の参加もお願いする必要があります。これは先ほど述べました国際協力の統合戦略の中で是非検討させていただきたいと思えます。

終わりに当たりまして、少し僭越ですが、2点お願いがあります。

一つは内閣府に設置されているSTI for SDGsの各府省、各機関連絡会をもう少し頻繁に開催していただき、戦略の共有と連携強化を図ること。すなわちホールオブガバメントを是非実現していただきたい。

もう1点はSTI for SDGs関連で例えば栄養サミット、TICAD8、SDGs首脳サミット、あるいは大阪万博等がこれから目白押しでございます。これらの日程の共有と多様なステークホルダーを巻き込んでいただくことをお願いしたいと思います。

非常に雑駁ですが、以上で私からの報告を終わります。

御静聴、ありがとうございました。

上山議員 中村顧問、どうもありがとうございました。

では、只今の御説明について、御意見、御質問がございましたらお願いします。約10分ほどでございます。よろしくお願いします。

では、橋本議員から、どうぞ。

橋本議員 中村顧問、どうもありがとうございました。

お伺いしたいのですが、私、当初から思っていて発言もしてきたのですが、我が国のこのSDGsの取組はSociety 5.0に代表されるように、最先端の技術を使って、それで世の中をよくしていこうと、社会をよくしていこうと、そうした取組で、そういうのが話を伺っていても、

我が国だけでなくても多い訳ですが、一方で今のお話にもあったように、やはり開発途上国、全ての人々を豊かにするというのがSDGsの大きな目的で、例えば私のよく知っている話で、覚えていたので言うと、例えばトイレの話があって、トイレで水を使わないで衛生的なトイレをと、これはINAXだったと思うのですが、SDGsのこれが始まった当初の頃、たしか5ドルぐらいだったと思うのですが、そうしたのをやって、それを開発途上国に配るんだみたいなことをやっておられたけど終わってしまった、要するに続かないから、利益として続かないから。

ということで、質問はそうした最先端の科学技術をどんどん展開していくということも重要なのですが、もう一方、そうではなくてお金の掛からない、ローテク、あるいはローテクと言わないですね、水を使わない水洗トイレもあれは随分工夫されているのですが、でも開発途上国に展開する技術というのは別の視点が必要なのだと思うのですね。

そうしたことが実は本当はとても求められているのだと思うのですが、それでは中々お金にならないこともあるし、それから科学者にとっても最先端の科学技術ではないということであまり注目されてない、あまりその話が出てこないということに対して、ずっと気になっていてそうした発言をしてきているのですが、ある会議でそうしたことを言ったらもう総スキャンを食らいまして、CSTI議員として科学技術をないがしろにするのか、みたいなことを言われたということがあったのですが、国連の場において、一体今のような、要するに開発途上国のための、開発途上国を持ち上げるための技術、科学技術という視点をもっと取り入れるべきだとか、そうした視点が重要だとか、その辺りの議論というのはどうなっているのでしょうか。

中村顧問 ありがとうございます。お答えしてよろしいでしょうか。

上山議員 少し時間もないので、たくさん実は手が挙がっておりまして、皆さんずっと回った後でそれぞれについてお答えいただけますか。

小谷議員、どうぞ。

小谷議員 中村顧問、ありがとうございます。

STI for SDGsでは中村顧問と一緒に色々な会議にも参加させていただいて、大変勉強になりました。

本日、グローバルパイロットプログラムで6か国のSDGs Indexスコアを見せていただいて大変参考になりました。この中でへこんでいるのが、ジェンダーと海の生態系という項目です。海の生態系は日本がもっと貢献できるのではないのでしょうか。

特に国際ARGO計画とか海洋に関するグローバルデータの国際的ネットワークでの収集に

関して日本は主導的立場で貢献しているのですが、そこが先ほど中村顧問が指摘されたようにバラバラといいますか、データ収集しているが、それを科学技術政策や産業とどうつなげるかというところが欠けているように思います。それはひょっとしたら内閣府の仕事なのかもしれませんが、そのことについてもよろしければ御助言いただければと思います。

上山議員 ありがとうございます。

続きまして、藤井議員、どうぞ。

藤井議員 ありがとうございました。

日本から国連のSDGs、特にSTI for SDGsのコミュニティにしっかり入っていただいているということはとても重要なことだと思いました。その上で今日色々お話を聞かせていただきましてありがとうございました。

学術コミュニティとしてもそうした場でしっかり活躍できる人をまず育てていくことが必要だと感じました。それが第1点です。

もう一つは先ほど10枚目ぐらいのスライドで社会とのインターフェースというお話がございましたが、ここは非常に重要なポイントだと感じました。

特にこの文化、価値観、倫理、それからトラストといったことにしっかり配慮することは重要だと思います。SDGsの達成には膨大な投資が必要だと思いますので、グローバルな経済メカニズムの中でSDGsに配慮した形で資金循環が起こるようなインセンティブが働くような仕組みを考えていく必要があると思います。

例えばEUでは、EUタクソノミーのような格好で、企業の投資や調達、イノベーション活動がグリーンなものであるかという明確な分類枠組みを定めることを通じてEUの環境目標に貢献する経済活動への資金を集めるようなことが行われています。我が国としてもこうした資金循環を重視したような施策を考えていって、それでSTIを下支えしていくことをやっていくべきではないかと思いましたので、もしその辺りの御議論がありましたら教えていただきたいと考えております。

手前みそになりますが、東京大学でもGlobal Commons Stewardship Indexの策定を進めております。最近立ち上がってきたところではあるのですが、OECDの書籍などでも取り上げられるに至っております、そうしたことに貢献できるのではないかと考えております。

もう1点御指摘申し上げたいのが、先ほどの途上国というお話もありましたが、各国ではSDGsへの取り組みにかなりエフォートを注いでいるという状況にあります。私どものところ

にも例えば国の大臣レベルから大規模に協力してほしいというお誘いを受けることもあり、政府と大学と民間が一体となって引き受けるような形ができております。先ほど中村顧問がおっしゃったように、我が国はまだ一体的に対応するような体制を取れていない状況にありますので、政府、大学、あるいは民間が一体となって対応できるような仕組みを考えていく必要があるのではないかと思います。

これはここでの議論の課題にもなるのかもしれませんが、ということの一つ申し上げておきたいと思います。

以上です。

上山議員 ありがとうございます。

では、佐藤議員、よろしく申し上げます。

佐藤議員 中村顧問、ありがとうございました。

幾つかありますがもう時間がございませんので、一つだけ中村顧問にお伺いします。資料の13ページにありますように、技術と外交というのは今やもう密接不可分になってきています。したがって、どの国にどのような技術でサポートしていくのかというのは、日本の国家戦略と直結している問題だろうと思います。

そうした意味で、以前上山議員もおっしゃっておられたように、外務省において、技術そのものについてどれだけの理解と戦略性を持っているのかということに少し疑問を持っています。中村顧問が国連でこの活動をされてきた際、各国が国家戦略の中で技術に関連する色々なアクションを起こしていたのだらうと思うのですが、日本は国家戦略と技術をきちんと戦略的に生かした上で、途上国の支援や議論に入っていたとお感じになっているのか、それとも日本の国家戦略、あるいは技術戦略というものがプライオリティも含めて十分生かされていないというご感想を持っておられるのか、その点について教えていただきたいと思います。

以上、1点です。

上山議員 ありがとうございます。

では、梶原議員、どうぞ。

梶原議員 ありがとうございました。

中村顧問には、私がC S T Iの議員になった最初のタイミングで弊社の汐留のオフィスにお越しいただきお話しさせていただきました。私がS T I f o r S D G sの重要性を認識したのは、中村顧問のお陰でして、3年間そうした認識の中で来ています。ありがとうございました。

今まで、C S T Iの議論ではSociety 5.0を通じてグローバルな課題解決に貢献していくのだということであり、SDGsの169のターゲットそのものに対して、それぞれどうするのかという話はあまり焦点を置いてこなかったと思います。例えば中国も戦略的にSDGsを使っているとお話しされておりましたが、各国において、こうしたSDGsの取組で日本と大きく違う要素、あるいは日本もこう変わるべきといったところをコメントいただければと思います。

ありがとうございました。

上山議員 ありがとうございます。

ほかの議員の方々よろしいですか。

ここでコメントを打ち切らせていただいて、まず橋本議員のハイテク科学技術とそうでない利用可能な科学技術の問題について国連でどう考えているのかということとか、それから海洋、生態系の問題について小谷議員から議論がありました。藤井先生の方は様々な論点がありまして、とりわけ文化、倫理、社会的なインターフェースの問題を御指摘いただきました。佐藤議員からは外務省とこのSDGs、我々の戦略とはどう関係しているかということ。それから、同じような質問が梶原議員からありましたので、それについてそれぞれ中村顧問の方からコメントのバックをよろしくお願いします。

中村顧問 ありがとうございます。

時間が限られていますので、一言ずつをお話しさせていただいて、特殊なテーマについては後ほどまたメール等で議論させていただければと思いますが、まずは橋本議員のお話は、国連では両方議論しておりますが、その比率からいきますと7対3か8対2で、どうしても先端技術の話が中心になります。これは開発途上国がそうした議論を望んでいるというのが、私は大きな原因だと思っています。

しかし、片方でGlobal Solutions Summit等のNPOの活動で、ラストワンマイル、最後の1マイルをどう克服するかという問題はずっと議論しておりまして、せめて6、4か、できたら5、5ぐらいに議論を戻すべきではないかと思います。残念ながら今までの5、6年近くは先端技術をとにかく開発途上国、我々にくれということで来たということで、私は非常に問題だと思っています。これは次の大きなテーマです。

ただ色々個別の話がありますが省略します。

小谷議員の海の生態系、これに加えて陸の生態系もあるのですが、この辺り、日本は個別には色々よくやっていると思うのですが、まとまったデータとありますか、大きな戦略とかそれ

を裏付けるエビデンスとか、そうしたものが発信できてないのではないかと私は考えておりました、誰がそれをやるのかというのを含めまして考えているところであります。個々については少し省略します。

藤井議員のお話ですが、ファンディングとかファイナンス、二つあって、一つは研究開発レベルのファンディングをどうするかというのと、それから実際に社会実装する、企業のためにどういうファイナンスを準備するかということです。前者についてはもう先生方正に議論していただいているのですが、後者についてはE Uはタクソノミー等を出してきていますが、企業が頑張るような何か指標というのですか、企業SDGs Indexみたいなのを日本発で考えていただいて、それにいい得点を取ったところはESG投資とか色々なところで優遇される仕掛けがあったらいいのではないかと、これはJST内で議論しているところです。これは是非東大の方で考えていただけないかと思っていたところです。

佐藤議員のお話ですが、外交はこれからソフト外交に移ると思います。橋を造ったり、インフラを造るといのは大事なのですが、それを生かす人材の育成とか、生かす研究開発といったソフト外交に移るという意味で、外務省とそれから実際に科学技術、イノベーションに関係している府省との連携が非常に重要な状況になっています。この3年間、私は両方の会話をスムーズにするために、あっちに顔出し、こっちに顔出し、という状況でしたが、そうした意味で先ほど内閣府の中で作っていただいている府省連携の会議、仕組みがありますので、あれをやはりせめて月に1回くらい開催していただいて、その中で徹底的に議論するというふうにやっていただいたらということをお願いしたいところです。

梶原議員の御質問について、日本とどれだけ異なるかですが、日本は世界から見るとSDGsランキング、インデックスランキングは17位、そのうちニュージーランドを除いて全てヨーロッパ、北欧の国々ですので、日本は世界から見ると優等生だと思われております。また実際に色々ないいことをやっている。

しかし、日本の弱みは日本自体が右肩下がりである。色々な数字が右肩下がりであって、これから例えば2030年になったときに、今のような日本を見てといたしますが、Look Eastというのは死語になってしまうのではないかと、日本自身をもっと科学技術力を強め経済を発展させて、それでもって各国に色々協力するという、そのトラックにもう一度戻らないともう今の日本のSDGsに関する優等生的な立場というのはどんどんこれから弱まってしまおうのではないかと、まず日本が強くなることではないかと思っております。

上山議員 ありがとうございます。

3年間にわたりまして、色々な形で側面から御支援いただきまして、心から御礼を申し上げます。もう少しこのような会を持つことができれば、我々のところとの議論の接点があったと思いますが、昨年、少し前ぐらいから基本計画のことでかなりの時間が取られてしまって、このような場を中々設けることができなかつたのは慙愧に堪えないという気持ちを持っております。

中村顧問には大変お世話になりまして、心から御礼を申し上げます。川合先生が後任に就かれると聞いておりますので、今後これまでのことをふり返りまして、今後ともこのような場を設けていきたいと思ひますし、今、中村顧問がおっしゃられましたような、我々に対する要望についても真剣に今後ここで議論させていただきたいと考えております。

本当に御苦労さまでございました。ありがとうございました。

中村顧問 どうもありがとうございました。

上山議員 それでは、本議題は以上とさせていただきます。

ありがとうございました。

午前10時37分 閉会